



AET2

Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part II

---

Friday 03 June 2016 09.00 to 12.00

---

### **Paper J13**

#### **Advanced Japanese texts**

Answer **all** questions.

Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** answer booklet.

#### **STATIONERY REQUIREMENTS**

*20 page answer booklet*

*Rough Work Pad*

#### **SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION**

*Shinjigen dictionary*

*Kojien dictionary*

**You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed to do so.**

## SECTION A

### 1. Translate the following **unseen** text into English. [30 marks]

#### 第二段

昔、ある男がいた。その男は、自分を（都にいても）役に立たない男だと思いこんで、（もう）京にいてもしかたがない。東国に移り住もうと考えて旅に出た。

そうして、仲間の人二人か三人といっしょに旅をするうち、遠江ととうみの国の八つ滝というところにさしかかった。八つ滝とは、そこに川があつて滝が八つあつたからそう呼ばれたのだと（趣味心のある人は）思うであろうがそうではなく、大層興ざめなことであるが、滝という名の人が昔八人住んでいたからそう呼ばれるのであり、不本意なことである。

そこで一行は足を休めて弁当をたべたりしたのだが、ふと見ると崩れかけた大層粗末な家の脇わきにはげいとうが咲いていた。そこで（一行の中の一人が）はげいとうを頭に詠みこ

んで歌を作ってみようと（提案したところ）、すぐさま男は次のような歌を詠んだ。

はげぬれば げにおそろしげ 井戸めぐり としのはじめの 馬の耳やも

〔昔から世間の人と言う通り、禿頭はげあたまの男が雨にぬれば、井戸の周囲のようにびしょびしょにぬれて（髪がないので大層冷えて、とんでもなくおそろしいめにあうという話があるように）、私は京にいる女性を思って（馬のように耳を立てて）噂うわさがきこえてこないかと望んでいる。だがそこにはただ風が吹いているだけ。悲しいことである〕

注…としのはじめのは、意味のない合の手のことば。

これを聞いて一行の人々は、それぞれに置いてきた恋人のことを思い出して涙をこぼしたので、弁当がびしょびしょになってしまったことである。

旅というものは人の心をか弱くするというが、（この話からも）よくわかるであろう。

Shimizu Yoshinori, *Ese monogatari*, Kadokawa shoten, 1991, pp. 9-10.

2. The following **unseen** text discusses a Japanese early-modern text vis-à-vis a Heian-period text. Explain what is the point made by the text and add comments on the basis of the readings done in J14. [40 marks]

復本 (笑) それです、ね、もとに戻してですね。  
一番僕が気になるのは、ハッチオンの定義の「パロ  
ディに用いられた背景になるテクストを発見し  
……」、この発見、ということが、荻野さんや夏石さ  
んのように西欧文学にお詳しい方にお話を伺うポイ

(TURN OVER)

ントになると思うんです。もとのテキストの発見、そこに謎解きのおもしろ味があるということなんでしょうが……、日本でパロディーの一番おもしろいところ、やはり本歌取りですよ。たとえば二条良基、ちよと荻野さんが研究していらつしやるラブレーと同じ時代の人なんですけども……

## 日本の パロディー文化

4

夏石 何世紀ですか。

荻野 一六世紀です。

復本 日本でいえば中世ですね。その二条良基が『近來風体抄』で、本歌取りについて、「堀川院百首の作者までを取るなり。同くは名人の歌をとるべし。勅撰は後拾遺までを取るべきと申き。但、今は金葉、詞花、千載、新古今などをとりたらんはなにかくるしかるべき」と述べています。つまり本歌取りでは、非常によく知られている歌、誰もが知っている歌を本歌とするべきである、だからパロディーが可能なんだということですね。

たとえば、『仁勢物語』という『伊勢物語』のパロディーがあるんです。『仁勢物語』というパロディーがなぜ出てきたかと申しますと、江戸初期になりまして活字本（版本）が一般的になって、『伊勢物語』が庶民に広く読まれるようになったという

★ハッチオン

Linda Hutcheon, 1997,

カナダの英文学者。トロント大学英文学・比較文学教授。

Question 2 continued...

ことがあるんです。

**夏石** みんなが知っているといっても、それはもちろん字が読める人ですよね。そういう古典の流布しているのはどの程度なんですか？

**復本** 当時の活字本だと、多くて三百くらいですね。百部から三百部くらいです。さらに筆写したものもありましょうし。

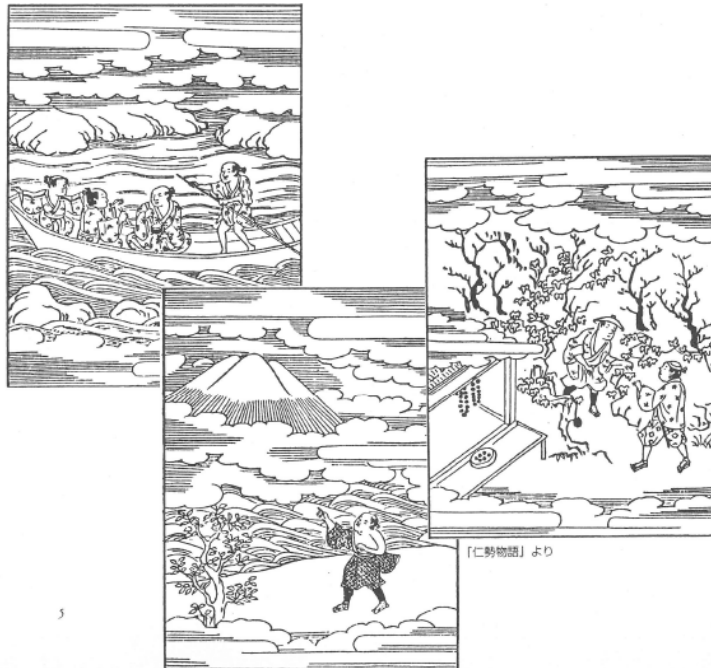
**夏石** でもそんなたいした数では……。

**復本** いや、だけど、『源氏』とか、それまでの世界では、写本だって何部ですからね。三百部というのは当時としては、大変な数だったわけですよ。

**夏石** もとの三百からどの程度ふくらむんでしょうか。

**復本** 俳人に限定しますと、かなり版本から写すという行為が行われていますね。正確な数はわかりませんが、かなり読まれている。なぜそれがわかるかというと、逆にパロディー化された作品があるというところ。それが証拠となる。

わかりやすい例で言いますと、『仁勢物語』と『伊勢物語』なんです。有名な「東下り」の段。『伊勢』で見ると、ある人が「かきつばた、といふ五文字を句のかみにすゑて、旅の心をよめ」という。



(TURN OVER)

それに対して、『仁勢物語』では、「かきつへた」です。

夏石 何ですかそれは？

復本 「かきつへた」というのは柿のへたですね。

『伊勢』で業平が「へから衣きつつなれにしましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ」と詠いますね。これを柿のへたで「歩道かちみちを昨日も今日も連立ちてへめぐりまわる旅をしぞ思ふ」。そして業平が都、そして都の女を思って「かれいひの上に涙をおとしてほとびにけり」、それに対して『仁勢物語』では、「皆人笑ひにけり」。典故を踏まえながら、こう完全に茶化すんですね。

次のところでは「宇津の山に……入らむとす」と「すずろなるめ」、大変な目に遭うというのを、「ひだるき目」、非常におなががすいて困っちゃったという。そして「駿河なるうつの山辺のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」。有名な歌ですね。あなたが私のことを思ってくれないから夢にも出ないんだという、女に対する恨みの歌。それが『仁勢』になると「駿河なる宇津の山辺の十団子銭がなければ買はぬなりけり」という茶化しになる。

夏石 「十団子」というのは例の俳句の？

復本 「十団子も小粒になりぬ秋の風」（許六）のあ

の「十団子」ですね。ですから『仁勢物語』を見ると、「十団子」が当時食されているという証拠にもなるわけですよ。宗教的なものというだけじゃなく、実際に食べられていたんだということ。

先にいって、『伊勢』の「白き鳥の、はしとあしと赤き、鴨しんの大ききなる」「都鳥みや」が『仁勢』では「白き顔に、おびと小袖と赤き、舟の上ふねに遊びて」の「都人みやび」になって、〈名にしおはばいざこと問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと〉という私の恋人は都で無事生きているかしら、それとも死んでしまったのかしらというこの有名な歌が、〈菜飯あらばいざちと食はん都人わが思ふほどはありやなしやと〉と、菜飯があつたらもう少しわけてくれとなる。そして「船こぞりて泣きにけり」が「舟こぞりて笑ひにけり」と完全にひっくり返しながら茶化していくんです。『伊勢物語』のほとんどの段で、こういうことは可能なわけですね。で、どうして可能かというと、先ほどの話に戻るんですけど、『伊勢物語』が本当に隅々までよく読まれていたからこそ読者も『仁勢物語』を読みながら、『伊勢物語』と重ね合わせることによって、おもしろさを倍加していくわけですよ。そういうパロディの作り方

★十団子  
「坂の上り口に茅屋四五十家あり。家毎に十団子を売る。其の大きき赤小豆ばかりにして、麻の緒につなぎ、古は十粒を一連にしける故に十団子と言ふならし」(『東海道名所記』)

(TURN OVER)

Question 2 continued...

が行われ、鑑賞がされていた。それが日本文学なんです。ここで先ほどのハッチオンの定義なんです、彼女によるとパロディとは、「用いられた背景になるテキストを発見し」という、この発見のおもしろさなんです。日本と西欧のパロディの違いですかね。

Ogino Anna (ed.), *Parodii no seiki*, Ozankaku shuppan, 1997, pp. 4-8.



3. Read the following **unseen** text and comment upon what is meant by 'Genji bunka'. [30 marks]

五、源氏文化の多様性

源氏物語は、千年前の作品が偶然伝わってきたのでも、また、爆発的に一般の読者を一時に獲得したのでもない。それぞれの時代、それぞれの立場の人々がさまざまに受け止め、多様な文化の形にして再生産することによって、千年の長きにわたって愛され続けてきたのである。お后教育、お后争いの手段にも用いられた物語が少女達の心をつかみ、和歌・俳諧を学ぶ人々が尊重し、謡曲が作られ、多くの絵が描かれ、絵入り本や注釈付きテキストが作られ、カルタや源氏香や工芸など、広い層のあらゆる文化に浸透する形で伝えられてきた。これこそが源氏文化であり、千年の文化である。これだけ懐の深い文学作品が世界にあるだろうか。

源氏物語の魅力について、人間ドラマ、心理描写、文体、表現力、語彙の豊富さ、出来事の多様さ、風景の美しさ、歌のすばらしさ、等々、人によってそれぞれ挙げるものは異なる。が、一つ明らかかなことは、源氏物語には、多くの表現者を虜にし、多彩な文化を生み出す豊かさがあるという

(TURN OVER)

Question 3 continued...

ことである。作家や歌人は自分のことばで源氏物語を再生産し、学者はそれぞれの学問に基づいた源氏物語を伝えようとし、芸術家は源氏物語で感性を表現する。古今東西の源氏物語に関わってきた人に共通するのは、源氏物語から受けた感動を、自分の表現方法によって多くの人に伝えてきた、ということである。ここにこそ、源氏物語が千年間も受け継がれてきた最大の理由がある。

源氏物語は名作である、だから読まなければならない、しかし難解である、だから原文では読めない、そんな悪循環は取り払おうではないか。古来の表現者が関わってきたように、源氏物語を楽しもうではないか。できれば限りなく原典に近い、より正しい千年前の源氏物語に近づければ、それだけ楽しみも深まる。源氏物語を専門家だけの物にしてはいけない。教育の道具に終わらせては残念である。恋愛小説として読むだけではあまりにももったいない。千年紀とこの機会に、源氏物語のあらゆる可能性を感じていただきたい。本屋には読み物（まさに玉石混淆ではあるが）が溢れている。美術展も各地で開催されている。その中から、好みに合った「作品」を選び、その表現者の作品であることを十分に理解した上で、千年前の源氏物語の世界に想像を巡らせたい。そして自らが源氏物語の新しい作品の表現者になって次世代に伝えていただきたい。

Question 3 continued

今回の展示では、五十四帖屏風に描かれている総計八十二場面(伝光吉五十四・氏信六十から重なりを省いた数)を目印に、源氏物語を概観できるとした。その絵と同じ場面が別の作品ではどのように描かれているか、その場面の前後にはどのような物語があるのか、そんなところに着目して鑑賞したい。その鑑賞法によって、ばらばらに配置されている作品が、源氏物語のどの部分に位置づけられているのか、どんな場面で源氏物語が構成されているのか、古来の人々はどこに心を寄せて源氏物語を受け止めていたのかが理解しやすくなると思う。若紫のかいま見、紅葉賀の青海波、須磨の夕暮れ、浮舟の橘の小島、という四例については巻末で紹介したが、この他にも多くの名場面がある。それぞれに発見していただきたい。

絵に描かれた場面は、単に色彩豊かで美しいから選ばれただけではない。そこには人々の出会いや別れや心の交流があり、その多くは和歌で表されている。歌の意味は巻末に示したが、無理に口語訳するより、歌に詠まれた題材が絵のどこに描かれているか注目して鑑賞したい。特に歌の中で掛詞(元祖ダジャレ)になっていることが多く、それらは絵に描かれているから、注意して探してみるとよい。一例を挙げると、伝光吉五十四帖屏風(横笛巻の「ところ」(山芋・所)である。他にも、歌とことばに注目して絵を見ると、意外な発見があるはずだから、ぜひ試していただきたい。日本語を理解できる人なら、歌が皆目わからないということはない。繰り返し声に出して歌を読み上げ、絵の中の人物になつて鑑賞してみるとよいだろう。あらすじや口語訳だけでは味わえない源氏物語の千年の文化を、一つ一つの作品を通して体験したい。ここにこそ日本文化の源泉、日本人の心のふるさとがあるのだから。

*Genji monogatari sennen kiten*, 2008,  
pp. 21-22.

**END OF PAPER**

Page 11 of 11